

「待てない」株主が増えていくなかで

第一生命経済研究所 常務取締役総合研究部長 中野 俊和

紀元1世紀ローマの政治家セネカが日常の些事に汲々とする友人に向けて、時間の浪費を戒めて(『人生の短さについて』)からほぼ20世紀、1973年にミヒャエル・エンデが、街の人びとから時間を奪う泥棒達との戦いの物語(『モモ』)を描いて34年が過ぎようとしている。今もこれらが読まれているのは、人間にとって「時間」やその「使い方」が常に変らぬ大きな関心事だからだろう。同時に、このことはいつの世でも足許の事象ばかりに追われがちな人間の本性もあぶり出しているように思う。

〈ゆっくり時間をかけて…とは思いつつ、つい目先のことばかりに追われてしまう…〉、現代もこうした感覚に囚われている人が多いのではないだろうか。そして最近益々その傾向が強まっているのではないだろうか。なぜ人は時間をゆっくり使えなくなったのか。なぜ目先のことばかりに気がとられるのか。このことを人と他者との関係のなかで考えてみたい。

大阪大学の鷺田清一氏は近著『「待つ」ということ』で現代を「待てない社会」と評している。常に「前のめりの姿勢」で「ものを長い眼で見る余裕がない」、未来を視野に入れずに、短期で結果を求める時代というわけだ。結果が出なければすぐに別のひと、別なやり方を求める「待たない社会」、「待てない社会」になったという。どうやら人が時間を十二分に使えないのは、それを他者が待ってくれないからとも言えそう。では、どうして他者は待ってくれないのだろうか。その背景のひとつとして、人びとがこれまで当然のように信用してきたものが崩れ去る現実を見て、「信用計」とでも呼ぶべきものが容易には動かなくなっていることがあるのではないかと思う。このために明らかに確かだと感じることで、例えば客観的な数値などしか信用せず、それ以外の不確かなものは信用しないという風潮が高まってきているのではないだろうか。他

者に対して不寛容になっているため、お互いに、不確かな人間が言う、不確かな未来についての、不確かな約束事などについては、信用もせず待つこともしない。つまるところ、不確実な何かを待つことが不安になり、眼前にある確かなものだけを見て、手っ取り早くその獲得を目指すことになる。人が待てなくなり、他者にも時間的な余裕を与えなくなったのは、こうした現代人の信頼メカニズムの変化も影響しているように思うのである。

この6月末までに3月期決算の株主総会が終わったが、今年は買収防衛策の導入是非とともに、新たに外資系ファンドなどの株主による大幅増配要求の提案が脚光を浴びた。これについては色々な見方ができようが、経営者を「信頼しない」「待てない」株主と「信頼して」「待つ」(待とうとする)株主双方の、企業価値分配のあり方を巡る争いであったと考えられなくもない。今回は会社側の提案どおりに可決された例が多いようだが、時代の趨勢から考えると、今後も投資の果実の早期分配を様々な形で要求する、「信頼しない」「待てない」株主が増えていくことだろう。

そうしたなかで経営者のとるべき行動は何か。目的は持続的な企業価値拡大である筈だ。その実現に向けて、自らを「信頼し」、「待つ」株主をいかに増やしていくか、これまで以上に注力しなければならぬだろう。適正な企業統治も前提となろう。「傲岸な不信」にも徒に敵対するのではなく、確かな論理と誠実さが必要である。根本は、信頼して待つ株主の期待に応えられる、信頼に足る事実を着実に積み重ねていくしかないと思うのである。ステークホルダーとの対話によって、株主以外の多様な層からの賛同者も増やしていくことも重要だろう。永続する確かな信頼のために、経営者のやるべきことは多いが、そこから得られるものも多いに違いない。